

**外国語教育メディア学会(LET)
第80回 (2012年度秋季) 中部支部研究大会**

プログラム

日時： 2012年12月1日 (土) 10:30-19:00

会場： 名古屋大学 野依記念学術交流館

〒470-0196 464-8601 名古屋市千種区不老町

主催： 外国語教育メディア学会(LET)中部支部

共催： 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

後援： 愛知県教育委員会

問い合わせ先：

〒487-8501 春日井市松本町1200

中部大学 語学センター

外国語教育メディア学会中部支部事務局 小栗成子

電話：0568-51-6649

メール：支部サイト(<http://www.letchubu.net>)の「お問い合わせ」

Twitter: @LETChubu

日程

- 10:00 受付 1階ホール
 10:00 展示 1階回廊
- 10:30 開会行事 2階カンファレンスホール
 司会： 村尾 玲美 (名古屋大学)
 開催校挨拶： 前野 みち子 (国際言語文化研究科長)
 主催者挨拶： 尾関 修治 (LET中部支部支部長)
- 10:45-12:00 講演 2階カンファレンスホール
 「教育実践の成果を確認するためのデータ処理」
 講師： 前田 啓朗 (広島大学 外国語教育研究センター)
 講師紹介： 柳 善和 (名古屋学院大学)

日々の指導と評価に関わるものや、研究のために改めて収集したものなど、教育・研究に携わる私たちの周りには多種多様なデータがあります。また、今後の改善に繋げることを目的とし指導を振り返ったり、教育実践の成果を確認したりして、報告することが求められることもあります。

そこで、この講演では、「教育実践の成果を確認するためのデータ処理」と題し、私たち外国語教育に携わる者が、日々の中で、どのようにデータを整理するとよさそうか、どのようにデータを分析するとよさそうか、どのようにデータを解釈すればよさそうか、といった観点から、「手元のデータを処理する」という観点から、事例を紹介します。

どのようなときにどのような統計的な分析というものが必要になるのかといったことにも触れ、外国語教育の実践を行っていく中でという文脈に沿い、場面や目的に応じた例を挙げて説明をします。

- 12:00-13:15 昼食・展示
 (-13:45)
- 13:15-15:30 研究発表 2階カンファレンスホール・1階会議室A・B
 第1室のみ13:15から、第2・3室は13:50から
 <第1室> 2階カンファレンスホール
 (1) 13:15-13:45 (2) 13:50-14:20 (3) 14:25-14:55 (4) 15:00-15:30
 司会： 古泉 隆 (名古屋大学)
 鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)
- (1) 「クラウドストレージを利用したスマートフォン用語彙学習アプリの開発」
 古泉 隆 (名古屋大学)
- (2) 「高等学校外国語 (英語) 学習指導要領における異文化理解の扱い—日中韓の比較考察—」
 市川 研 (日本大学)

(3) 「Validating the L2 Motivational Self System of Chinese Learners in an ESL Context」

張 建英 (名古屋大学大学院)

(4) 「体感音響振動を活用した聴覚障がい者の英語発話の改善—教員による音声評価の分析—」

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

<第2室>

1階会議室A

(1) 13:50-14:20 (2) 14:25-14:55 (3) 15:00-15:30

司会： 三上 仁志 (名古屋大学大学院)

菊池 優希 (名古屋大学大学院生)

(1) 「中期以上の留学経験を有するJEFL学習者の帰国後のテクノロジー使用とImagined Communitiesへの参加継続の関係性について：探索的研究」

三上 仁志 (名古屋大学大学院)

(2) 「REXを活用した英語リーダビリティ式のパーソナライゼーション手法の提案」

大城 敬人 (静岡大学大学院生)

宮崎 佳典 (静岡大学)

(3) 「日本語を母語とした英語学習者の単語認知における音韻処理について—光トポグラフィーを用いた脳活動計測による検討—」

菊池 優希 (名古屋大学大学院生)

木下 徹 (名古屋大学)

<第3室>

1階会議室B

(1) 13:50-14:20 (2) 14:25-14:55 (3) 15:00-15:30

司会： 福田 純也 (名古屋大学大学院)

杉浦 正利 (名古屋大学)

(1) 「統語的及び語用論的逸脱への注意における干渉負荷の影響：大文字・小文字混合提示条件の判断課題を用いて」

福田 純也 (名古屋大学大学院)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

(2) 「第二言語学習者における産出語彙の親密度・心像性・具象性：学習者コーパスNICEを用いて」

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

(3) 「視線計測を用いたドイツ語連語表現の処理に関する研究 —母語と第二言語におけるコロケーション知識の相違について—」

杉浦 正利 (名古屋大学)

成田 克史 (名古屋大学)
藤村 逸子 (名古屋大学)
山下 淳子 (名古屋大学)
梁 志鋭 (名古屋大学)
坂東 貴夫 (名古屋大学大学院)

15:45-17:15 シンポジウム 2階カンファレンスホール
「統計手法を用いたデータ分析とその解釈—何が必要でどう利用すべきか—」

パネリスト：

水本 篤 (関西大学)
天野 修一 (日本福祉大学 非常勤講師)
阪上 辰也 (司会；広島大学)

コメンテーター：

前田 啓朗 (広島大学)

本シンポジウムでは、統計手法を用いて実験調査を行う3名のパネリストが、それぞれの研究やその際に用いる統計手法・処理ツールについて報告する。

日本の外国語教育研究においては、適切な評価とその解釈の重要性は未だ十分に理解されているとは言いがたい。そこで本シンポジウムでは、外国語教育における統計手法を用いたデータ分析とその解釈の問題に深い関心を持つ3名のパネリストが、それぞれの持つ問題意識を報告する。さらに、各パネリストの報告に対してコメンテーターが意見を述べ、問題や留意すべき点を整理する。

はじめに、研究目的に合わせた、より好ましい統計手法と結果の図示の仕方について触れる。次に、無償の統計ツールを用いた反応時間データの分析事例を紹介する。最後に、外国語音声を音響分析する際の持続時間測定に関わる諸問題について、第二言語リズムの研究を例として取り上げながら報告する。

これらの報告や質疑応答を通じ、聴衆と問題意識を共有し、現状考え得る改善策を提示することを目指したい。

17:30-19:00 懇親会 1階ホール

研究発表概要

<第1室>

発表1 クラウドストレージを利用したスマートフォン用語彙学習アプリの開発
古泉 隆 (名古屋大学)

発表者はこれまでスマートフォンで動作するフラッシュカード型の語彙学習ツールを開発してきた(古泉他,2011)が、ウェブベースのツールであったため、表示する単語項目のデータはウェブサーバーに置かれ、単語データを学習者が自ら作成・変更できないことが課題であった。この問題を解決するために、本研究では、誰もが容易に利用できるクラウドストレージにデータを置き、学習者のPCからクラウド上のファイルにアクセスし自由かつ容易にデータの作成・編集ができるようにし

た。スマートフォンからも、開発したアプリを通して、同じストレージ上のデータにアクセスしデータ項目を表示するとともに編集もできる。また、同アプリは、Text-to-speechを利用することで英語や日本語のテキストを読ませることが可能となった。発表では、開発したアプリの概要を説明するとともに、同アプリを利用した語学学習の例を提案する。

発表2 高等学校外国語（英語）学習指導要領における異文化理解の扱い—日中韓の比較考察—

市川 研 (日本大学)

グローバル化が進む現在、英語はアジアの共通語としての地位を占めつつあり、アジアの学習者たちが英語を使用してコミュニケーションをする機会が今後はより多くなるであろう。その際、言語教育にて養われると思われる異文化理解能力はどのようなものかを理解しておくことは言語コミュニケーションの教育に携わる者にとって意義があると思われる。アジアの国々で異文化理解は英語教育の中でどのように扱われ、教えられているのであろうか。そこで、漢字文化圏である日中韓の3か国で高等学校外国語学習指導要領（に相当するもの）の異文化理解に関する点の比較分析を行った。そこから見えてくるであろう言語政策的背景や言語観にも注目して、国策として生徒たちにどのような異文化理解力をつけさせることを目標にしているのかを探りたい。そして分析した結果を日本の外国語教育政策において具体的にどのように活かせるかを考察してゆきたい。

発表3 Validating the L2 Motivational Self System of Chinese Learners in an ESL Context

張 建英 (名古屋大学大学院)

The most recent theory of L2 motivation is Dörnyei's L2 Motivational Self System, which subsumes the ideal L2 self, ought-to L2 self, and L2 learning experience. Since it was developed in 2005, a lot of SLA researchers have been promoted to examine its external validity. However, almost all of the research was conducted in foreign language learning contexts, without considering second language contexts. To bridge this gap, the present study aimed to replicate Dörnyei's tripartite model in a Chinese population who were learning English as a second language (ESL) and thereby investigated its generalizability in this specific context. A questionnaire survey was completed by 405 Chinese-background students from five Canadian universities. Through analyzing the data by using SEM, it was found that Dörnyei's theory only gained partial support in the Chinese ESL context because the dimension of the ideal L2 self did not contribute to the criterion measure directly.

発表4 体感音響振動を活用した聴覚障がい者の英語発話の改善—教員による音声評価の分析—

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

聴覚障がい者を対象として体感音響振動システムを活用することにより、英語プロソディ習得を促す取組について検証する。先行研究で取り扱った文と句・複合語の発話データについて、音響分析以外の方法を試みる。先行研究では、発話データの全体の時間長・音調核の時間長・全体に対する音調核の割合・音調核の音圧等に焦点をあてて、英語プロソディ習得の改善について事例ごとに分析して報告をしている。本研究では、ゲシュタルト、つまり音の固まりとしての全体的処理に焦点をあてる調査として、日本人英語担当教諭に発話データの主観的評価を依頼し、事前・事後の評価について実験群と統制群の統計的に有意な差を検証している。その結果、実験群において体感音響振動

の英語プロソディ習得に与える効果が検出されている。先行研究の音響分析による改善の評価と今回の主観的評価を比較することで、発話データの解析法について考察する。

<第2室>

発表1 中期以上の留学経験を有するJEFL学習者の帰国後のテクノロジー使用と
Imagined Communitiesへの参加継続の関係性について：探索的研究
三上 仁志 (名古屋大学大学院)

習得目標言語をL1とする国において行う中期（8ヵ月）以上の留学活動は、JEFL学習者の言語面のみでなく、帰国後の学習動機づけ・学習態度等の非言語的側面にも正の影響を与える事が報告されている。本研究は、学習者の帰国後の自律学習に対し、(1) 目標言語使用集団／共同体 (Imagined Communities = IC) への参加意識、(2) Internet-based technology (IBT) 利用、の2要素が果たす役割について探索的な分析を行ったものである。本研究では、EFL環境での学習経験、中期以上の留学経験、高習熟度、帰国後の年数の4条件から44名の大学生・大学院生を調査対象者として設定した。質問紙およびインタビュー調査の分析結果として、(1) 本研究における自律学習は、IBTの利用を通じ継続されたICへの参加から動機づけられており、(2) 上記のIBTとICの関係性は自立学習と結びつくだけでなく、学習者の自発的な再学習を促す可能性がある事、の2点が判明した。

発表2 REXを活用した英語リーダビリティ式のパーソナライゼーション手法の提案
大城 敬人 (静岡大学大学院生)
宮崎 佳典 (静岡大学)

リーダビリティとはテキストの可読性を指し、その値を算出する関数（リーダビリティ公式）は多く開発されてきた。しかし各人の得意／不得意は異なるため、大衆向けの公式が万人に有効かは疑問が残る。そこで著者らは英語リーディング学習に焦点をあて、公式とは一線を画し、学習者の学習履歴情報からリーダビリティ“式”をパーソナライズすることを考案した。対象とするテキスト群に対し、学習者ごと作成されたリーダビリティ式を適用し、各人が学習に“相応しい”と感ずることが期待されるものを抽出／提供するWebアプリケーションREXを開発している。一方で、各人がリーダビリティ式に有効な要因を自ら適切に選択するのは困難である。ゆえに、学習履歴情報から有効な要因を推測し、リーダビリティ式に組み込むべきREXを改良した。本発表では、実験に作成した各学習者用リーダビリティ式と公式の比較等から、この手法の効果を考察する。

発表3 日本語を母語とした英語学習者の単語認知における音韻処理について—光トポグラフィを用いた脳活動計測による検討—
菊池 優希 (名古屋大学大学院生)
木下 徹 (名古屋大学)

単語認知に関して、Colthert, et al. (2001)では二重経路モデル (Dual Route Cascade model) が提唱されている。このモデルでは、単語全体の文字パターンから意味表象にアクセスする直接ルートと、GPC規則に媒介された間接ルートがあるとされている。

この二重経路モデルに関して、近年では脳機能イメージング手法を用いた実験が盛んに行われている (Fiebach, et al., 2002など)。これらの先行研究から二重経路モデルの間接ルートには下前頭回の活動が関連していることが明らかとなっている。しかしこれまでの先行研究は母語のみを取り扱ったものが多く、第二言語を取り扱った研究は僅かである。

そこで本研究では英語の上級学習者を対象とし、高頻度規則語、高頻度例外語、低頻度規則語の3つの条件による語彙性判断課題を実施し、その際の下前頭回の活動を調査した。実験の結果、高頻度語よりも間接ルートに依存するとされている低頻度語において、左半球の下前頭回の活動が顕著に見られた。この結果より、下前頭回の活動から考えられる間接ルートの利用は、学習者においても母語話者と同様の傾向を示す可能性が示唆された。

<第3室>

発表1 統語的及び語用論的逸脱への注意における干渉負荷の影響：大文字・小文字混合提示条件の判断課題を用いて

福田 純也 (名古屋大学大学院)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

第二言語学習者の持つ文法知識に関しては、明示的知識・暗示的知識の二分法が提案されている。一般に明示的知識は、認知的資源を消費する意識的な統制処理を伴い、暗示的知識は認知負荷とは独立した自動的な処理を可能にするとされている。しかしながら、語用論的側面における学習者の注意、及び二つの言語知識の役割についての研究は僅かである。本研究では認知心理学で用いられる干渉課題の見地に立ち、大文字と小文字を混合させた刺激提示による統語的及び語用論的逸脱性の判断課題を用いて、二つの種類の逸脱に対する学習者の注意がそれぞれどのように変化するかを調査した。

提示条件の例：I CAN't Do It toDAy But I wILL Do It nExt wEEK.

15名の大学院生 (TOEIC: M = 791.88) が実験に参加した。課題の正答率を従属変数とした二元配置分散分析 (提示条件：通常提示・混合提示×逸脱の種類：統語的・語用論的) の結果、混合提示条件は、語用論的逸脱への注意のみを抑制することが分かった。発表では、異なる側面における言語知識と注意の関係性、及び本測定法の可能性について議論する。

発表2 第二言語学習者における産出語彙の親密度・心像性・具象性：学習者コーパスNICEを用いて

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

これまで第二言語における語彙習得の研究や、学習者コーパスを用いた量的研究では、使用語彙の多様性、及び語彙の一般的頻度に基づく産出語彙の計量分析が盛んに行われてきた。しかしながら語彙が持つ特性には、頻度の他にも、話者の主観的評定に基づく心理言語学的特性も存在する。

そこで本研究は、心理言語学的特性の評定値に基づき、日本語を母語とする英語学習者における語彙の産出傾向について調査した。学習者コーパスNICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) に採録されているエッセイを対象として、三つの心理言語学的特性 (親密度、心像性、具象性、評定値のデータはMRC Psycholinguistic Databaseを使用した) に着目し、各エッセイの異なり語数における低評定語 (2000位以下) が占める割合を分析した。

結果、以下の四つの点が明らかになった。

1. 学習者は英語母語話者よりも、高い親密度、心像性、具象性を持つ語彙を使用する傾向が強い
2. 三つの心理言語学的評定値とTOEICスコア及びエッセイ評価の相関関係は非常に弱い
3. 親密度は語彙の多様性指標、及び頻度に基づく指標と中程度の相関関係がある
4. 三つの心理言語学的評定値には強い相関関係がある

発表3 視線計測を用いたドイツ語連語表現の処理に関する研究 —母語と第二言語におけるコロケーション知識の相違について—

杉浦 正利 (名古屋大学)
成田 克史 (名古屋大学)
藤村 逸子 (名古屋大学)
山下 淳子 (名古屋大学)
梁 志鋭 (名古屋大学)
坂東 貴夫 (名古屋大学大学院)

母語と第二言語におけるコロケーション知識の相違を明らかにするため、ドイツ語の連語表現を対象に視線計測装置を用いて行った実験について報告する。

実験では、連語表現（「形容詞＋名詞」）の共起頻度が高い条件と低い条件を設け、ドイツ語母語話者6名と日本語母語ドイツ語上級学習者6名を実験参加者として、頻度による凝視時間の違いを観察した。実験文は高頻度と低頻度の14ペア、28文を使用した。

例. Ein Vogel fliegt am [blauen Himmel / stillen Himmel] südwärts.

訳：鳥が[青い空(高頻度) / 静かな空(低頻度)]を南へ飛ぶ。

ウィルコクソンの符号順位検定を用いた分析の結果、母語話者では、条件間で凝視時間に有意差が見られたが、学習者では有意差は観察されなかった。この結果は、学習者が母語話者ほどコロケーション知識を持っていないということを示唆していると考えられる。

賛助会員展示

チエル株式会社
株式会社 内田洋行

<http://www.chieru.co.jp/>

<http://www.uchida.co.jp/>

(受付順)

大会参加のご案内

- 会員の方の参加費は無料です。非会員の方は参加費1,000円を受付でお支払い下さい。
- LET会員として入会手続きをしていただきますと、当日参加費から無料になります。また会員は、LET全国研究大会、支部研究大会での研究発表、紀要への投稿などができます。

第81回（2013年度春期）支部研究大会のご案内

- 次回第81回の支部研究大会は2013年5月25日（土）、東海学園大学での開催を予定しています。
- 研究発表の受付は2013年3月に支部Webサイトにてご案内します。

LET中部支部Webサイト（10月末に移転しました）：<http://www.LETChubu.net/>